

動物園で国際理解

一文系学生を対象に実施したアンケート調査からみる動物園利用の可能性

川口芳矢

(公財) 横浜市緑の協会 よこはま動物園

動物園は多種の絶滅危惧動物を展示し、飼育下繁殖によって種の保存に貢献するのみならず、生息地の現状や絶滅危惧となった背景などを伝える教育施設としての役割を担っている。しかし、一般には「動物を見て楽しむ娯楽施設」として認知されていることが多く、それが故に動物園に対して否定的な考えを持つ人もいる。今回、動物園を利用することが少ない文系大学生を対象に動物園が行っている保全教育活動について講義する機会を得た。その際、受講学生の意識の変化をアンケート方式で調査した。「野生動物を絶滅から守るために必要だと思うものは何か」を問うと、講義前では『生息地の確保』が必要と回答する学生が最も多かった。しかし、世界各地と動物園が関わっている状況や実際の生息地での保全活動、生息地の現状を取り入れた動物園での教育活動や生息地との技術協力事業など、講義が進むにつれて『生息地の確保』の割合が減り、『生息地の人々への教育』『生息地での雇用確保』『生息地の人々の理解』『先進国の理解』『先進国の介入』『先進国の行動変容』など多岐に渡る項目で割合が増加し、受講学生は野生動物の絶滅には様々な問題が関連していると意識が変化した。また、動物園の意義や国際協力・国際理解のあり方を再認識したとの感想と同時に、「あらためて動物園に行ってみたくなった」との声が多く寄せられた。従来、動物園では理科・生物分野での教育利用が多かったが、社会科・国際理解教育分野での利用も動物園意義の理解促進に有用であると示唆され、動物園利用の新たな可能性の一助としたい。